

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04743

研究課題名(和文) 地域デザインプロジェクトをテーマとした課題発見解決型デザイン教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Development of a Problem-Discovery and Solution-Oriented Design Education Program with a Focus on Community Design Projects

研究代表者

梶原 良成 (Kajihara, Yoshinari)

宇都宮大学・共同教育学部・教授

研究者番号：70334076

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教員養成大学の授業において、地域事業者と連携して、デザインによる課題発見解決を試みるプロジェクトに取り組み、リアリティのあるデザイン教育にアプローチする方法を検討することが目的である。デザインマッチングを通して、事業者の話を聞いたり周辺の地域資源に着目したりしながら、受講者各自の視点で課題を見つけ、それに応答する回答を見出す過程を経ることで、課題発見解決型のPBL (project-based learning) としてデザインの授業に資するプログラムの道筋を見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デザインが社会での関係を作り出し調整したりする活動であることは認識されてきているが、それを理解するためのデザイン教育として実際の授業に組み入れていくための方法論についてはまだまだ未開拓である。本研究はそれに先鞭をつけるかたちで、実際に地域事業者と連携するプロジェクトに取り組む授業を通して、プログラム構築の道筋をつけたことに少なからぬ意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to explore approaches to realistic design education by engaging in a project that attempts to discover and solve problems through design in collaboration with local businesses in a teacher training university classroom. Through design matching, the process of listening to the businesses' stories and focusing on the surrounding local resources, the participants were able to identify problems from their own perspectives and find responses to them. This led to the discovery of several pathways for designing a program that contributes to problem-discovery and solution-oriented project-based learning (PBL) in the classroom.

研究分野：教科教育学

キーワード：デザイン教育 地域デザイン デザインプロジェクト 地域プロジェクト 美術科教育 課題発見解決型

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ディレクターの一員として参画した地域プロジェクト「地域産業とデザイン～宮の注染を拓く～」において、研究室の所属学生たちは、子どものためのワークショップなどに参加し、机上では得られない様々な体験による学びを経験することができたことが発端にある。

近代デザイン運動が社会的な問題であることは当初から明らかであったが、20世紀の商業主義に覆われ、実際に地域とデザインを結びつける動きはなかなか顕在化しなかった。それに抗する流れとして提出された論考にケネス・フランプトンによる「批判的地域主義」(1983)がある。近代デザインに代表される普遍的な方法を慎重に利用しつつ、地域に存在する普遍化に抵抗する文化やアイデンティティを与える文化を展開させることを提唱していて、地域に立脚しながらデザインを進めて行くことの重要性を理論的にバックアップする言説になっている。

(2) デザインとはまさしく私たちの身の回りの生活や地域社会のなかで課題を見出しそこに何らかの働きかけを行いより良い関係をつくり出そうとする根源的な活動であり、また重要なものは、地域をデザインして行く活動は専門家の問題ではなく、市民一人一人の問題だということである。初等中等・美術教育において、他教科と連携して次世代の生活環境づくりに創造的な力を吹き込むことができ、各発達段階に応じて実感が持てる身近な生活に密着した課題をカリキュラムに取込んで行くことが必要不可欠であるとの問題意識があった。

## 2. 研究の目的

(1) デザインの目的は、ともすると売れる商品づくりやその宣伝広告といった消費を促すことのように見なされ、生活環境やコミュニティの問題をはじめとする社会的な課題の発見と解決というその本質を見失われ勝ちである。

(2) 一方で、初等教育から中等教育におけるデザイン分野の授業内容を見ると、形態色彩の操作に終始したり、現実の生活や社会とのつながりが見え難い課題が扱われている場合が少なくない。本研究の目的は、具体的な地域をピックアップし、地域の様々な状況に向き合っ学生が課題を発見し解決することから、そのプロセス・成果をフィードバックしながら検証することで、身近な地域生活環境づくりを取り込んで生活に密着した美術科の授業づくりに資するデザイン教育プログラムについて探究し、提案することにある。

## 3. 研究の方法

(1) 準備段階では、次に想定している地域プロジェクトと連携した授業課題の事前準備を行う。栃木県那須郡那珂川町において、自治体や地域おこし協力隊の協力を得て、住民と交流をしながら、地域の問題をありかを探っていく。そのなかからテーマにふさわしい地域プロジェクトを検討して、地域のハード・ソフト両面の資産を調査し、教育プログラムの基礎データとしてその種別・内容・特徴などをデータベース化した。

先ず、この地域の状況を把握するために、自治体や住民とのコンタクトルートを確立して、優先的に解決すべき問題点や、活用されていない地域の資産を探っていく。その過程から、デザインの力が有効に働きうる地域プロジェクトのテーマを明確化し、ピックアップして、調査計画を策定した。

調査計画策定と平行して、地域デザイン・プロジェクトの先進地を現地視察し、関係者に聴取するなどして、得た知見で参考にすべき点をプロジェクトの計画にフィードバックする。決定された調査計画に従い、研究室・学部ゼミ生3-4年生3名とともに調査を始め、とくに地域デザインの対象として再構築を必要とするコミュニティや事業所及び地域の拠点になりうる潜在的なポテンシャルを持った空き家・空き店舗などを中心に調査し、結果を整理した。

(2) 調査結果をもとに地域プロジェクトと連携した授業課題を策定し、発掘してきた地域資産を

生かす事業・商品・イベント企画、地域計画案、情報発信、保存活用、景観保全などの提案を授業課題と連携して行い、町や地元住民に発表して、自由に意見交換を行った。また以上の全プロセスについて逐次記録を取った。

前年度に実行した地域プロジェクトの調査結果をまとめたデータベースをもとに、ゼミ生がサポートしながら、授業受講学生は事前に下調べをした上で実地調査を行った。各自が場所の選定を行い、問題設定をした上で、プロジェクト案の作成を進めた。

#### 授業における地域プロジェクトの実際の取り組み 平成30年度（2018年）

▶連携先事業者：那須神田城址、扇の館 ▶事業者業種：国の史跡・那須神田城址とそれに隣接する飲食店 ▶参加学生数：8人（宇都宮大学教育学部美術教育専攻学生＋同大学院教育学研究科美術専修学生） ▶デザインマッチング日：5月26日（日）▶プレゼンテーション日：8月26日（日）▶発表場所：那珂川町役場 ▶依頼内容：那須神田城址ロゴマーク、扇の館ロゴマーク、のれん、のぼり、その他自由提案



#### 令和元年度（2019年）

▶連携先事業者：ブルーベリー園さとう ▶事業者業種：ブルーベリー生産農家 ▶参加学生数：5人（宇都宮大学教育学部美術教育専攻学生＋台湾師範大学美術系学生・交換留学生）▶デザインマッチング日：5月26日（日）▶プレゼンテーション日：8月21日（水）▶発表場所：那珂川町役場 ▶依頼内容：ロゴマーク、メッセージカード、その他自由提案



### (3) 地域プロジェクト授業のプロセスと内容

地域プロジェクトは、年度ごとに若干の変動があるが、基本的に下記の通りに進めた。授業回数としては、デザインマッチングを含め、9回である。

1. 事前準備：連携先の選定
2. 第1回：デザインマッチング
3. 第2回：調査
4. 第3回：課題発見
5. 第4回：アイデアの創出
6. 第5回：コンセプト立案
7. 第6回：エスキース
8. 第7回：成果作品制作
9. 第8回：プレゼンテーション資料作成
10. 第9回：プレゼンテーション

地域プロジェクトと連携した授業課題について、場所の選定から、住民との交流、問題点の把握から提案に至るプロセスを振り返り、また地域による状況の多様性に留意しながら、普遍的な図画工作科美術科における実技課題としての可能性問題点を検証・分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 地域プロジェクト授業の意義の明確化

美術とは社会と何らかの形でつながって初めて美術になる。とくにデザインは自分の身の回りや社会のことやものをつくりだすそのものの活動である。それは通常の授業に閉じた題材でも

不可能でないが、あらゆることが仮定の条件で行われるため冒頭にも書いた通り、現実の状況の踏まえ方が浅い提案になってしまったり、課題に対する提案として適切なものであるのか検証が十分行いきにくいなど種々の問題があった。これまで紹介した那珂川町と町内事業者と大学の連携による地域プロジェクトは、事業者の事業が関係する範囲内という限定はあるものの、そこから学生が自分なりに課題を見つけよりよい状況の創出や解決の道筋などを提案する授業題材であり、そこにはデザイン本来のあり方が含まれている。とりわけ架空の題材では十分でない課題の発見について、各個人が観察力や想像力を働かせて取り組むことができることが非常に重要なことと考えている。

もうひとつ重要な点として、学生が美術と社会との多様なつながりを各自の実感として意識できることである。一事業者に関わるプロジェクトでも、デザインすることが単に商売上のことのみならず、社会におけるコミュニティのあり方への新たな提案にも関わっていること、プロセスの各段階で自分なりの発見の仕方気付くこと、これも地域プロジェクトならではの利点と考えている。さらにプロジェクトの随所にデザインの鑑賞教育のポイントが仕込まれている点も大事な点である。プロジェクトを始める前もまたデザインされた状況が存在しているのが社会である。観察や調査を行うことからすでにデザイン鑑賞教育なのである。そして一緒に同じプロジェクトを進めている他の受講生の発表を聞くことも大いなる鑑賞の場である。デザイン鑑賞とは特別な展覧会などではなく、ありふれた日常のなかに存在するがゆえにお膳立てがしにくい特性をもっているが、それがさりげなく組み込めるのが地域プロジェクトの強みでもある。

## (2) 成果まとめ

平成29年に告示されスタートしている新学習指導要領において、基礎にある考え方は、学習のコンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへの転換にある。「社会に開かれた教育課程」の実現が志向され、図画工作科や美術科において「生活」や「社会」が中核的な意味を持つ言葉として使われるようになってきている。「生活」や「社会」とは、子どもたちにとっては先ず家庭であり学校であり、次にはそれらが存在する「地域」である。また「主体的、対話的で深い学び」とされるアクティブラーニングによって行われることと連動することが想定されている。ここで紹介した地域プロジェクト授業は、「地域」を対象とする課題発見解決型のPBL (project-based learning) であって、新学習指導要領の方向に先行する、将来の教員へのコンピテンシーに資する実践とも言えるものである。上記の通り、「地域とのつながり」「課題発見解決能力」が、中学校のみならず小学校でも志向されていることを踏まえると、将来それらの学校でPBLによる「デザイン」の授業を見学生徒に行う学生たちへ向けて、教員養成のカリキュラムに「地域とのつながり」「課題発見解決能力」「デザインへの深い理解」を目的とするPBLによる授業が組み込まれることに、デザイン教育へのアプローチとして大きな意義があることを明確化することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 梶原 良成 / 梶原 紀子	4. 巻 6号
2. 論文標題 県立特別支援学校および小学校特別支援学級におけるドローイング・ワークショップ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 557 - 562
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶原 良成	4. 巻 70号
2. 論文標題 地域プロジェクトを題材としたデザイン教育 これまでの取り組みと今後の展望について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 259 - 271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶原紀子 ・ 梶原良成	4. 巻 5号
2. 論文標題 特別支援学校におけるドローイングワークショップの実践報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 495 - 499
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 梶原良成
2. 発表標題 地域プロジェクトをテーマとしたデザイン教育の可能性
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 『美術教育の理論と実践』編集委員会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 237
3. 書名 美術教育の理論と実践 第2巻	

〔出願〕 計0件

〔取得〕 計1件

産業財産権の名称 カレンダー	発明者 梶原良成	権利者 同左
産業財産権の種類、番号 意匠、意願2022-008514	取得年 2022年	国内・外国の別 国内

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------